詞では、「新古今」は比較的状態表現が多く、「古今」は心理描写が多いと言えるように、相違が見られた。意義分

『彼岸過迄』論

三十回生　高見明子

目次

序……
本論……
第一章　市蔵の生い立ちと家庭……
第一節　母と家庭……
第二節　市蔵と母……
第二章　市蔵の苦悩について
　―千代子との関係を中心に……
第一節　市蔵の性格とその悲劇……
第二節　市蔵の希求するもの……
第三章　構想について……
第一節　構成とその意図するもの……
第二節　敬太郎とその存在意義……
第三節　「雨の降る日」とその役割……
結び……

漱石後期の三部作の第一作である『彼岸過迄』は、明治四十五（一九一二）年の一月一日から四月二十九日まで朝日新聞に連載された。この作品が完成度の高いものでないことは従来指摘されている。しかし、さまざまな問題を孕み、漱石の作家的立場としても大きな転換を迎えたことが窺える作品でもある。特に、須永市蔵の造型は漱石文学後期に通じていくエポックメーキングな試みであり、その内面的描写の深まりと深刻さはそのまま作者漱石の自己洞察へと重なっていくものであろう。

本稿では紙幅の関係で、『彼岸過迄』論の第一章と第二章からの抜粋によって、市蔵の苦悩についてその本質を明らかにしたい。（なお、註は省略する）

第一章　市蔵の生い立ちと家庭

須永市蔵は父を早く亡くし、母と二人「衣食の上に不安の憂を知らない好い身分」で、「淋しいやうな、又床しいやうな生活」を送っている。この市蔵の生い立ちは「須永の話」で彼の口から語られる。父は生前彼を枕元に呼んで、「市蔵、おれが死ぬと御母さんの厄介にならなくつちやならないぞ。知つてるか」と言う。母は「御父さんが御亡く

なりになっても、御母さんが今迄通り可愛がって上げるから安心なさいよ」と言う。このような普通の親子間では考えられないような両親の言葉が幼い市蔵の心を曇らし、そして彼は自分と母の間に何か触れてはいけない畏怖の念を感じながら成長していくのである。「松本の話」でこの言葉の謎が解かれる。「一切の秘密はそれを開放した時始めて自然に復る落着を見る事が出来るといふ主義」のもとに、松本は市蔵の「僻み」を形成した起因として、彼が小間使の子であるという事実を打ち明ける。しかし、この出生の秘密に即した目に見えない母子間の異状な心理状態まで松本は解していなかったように思う。この事実を知らなかった市蔵の「僻み」は、もはやこの事実に即した特殊な母子関係によって形成されたという方が妥当であろう。従来、市蔵の母や彼らの家庭については多く論じられていないように思う。ここでは出生の秘密に即して市蔵の母と家庭を見ていくことで彼の心理に近づきたい。

まず「松本の話」で、市蔵の心を曇らした両親の不思議な言葉は理解できる。第三者には「本當の母子よりも遙かに仲の好い繼母と繼子」と見えるその状態の根底には、畏怖の念からくる複雑な心理が隠されていたのである。先に挙げた「御父さんが御亡くなりになっても……」という言葉は、母親自身が自分に無理に言い聞かせている感じがなくもない。市蔵が小間使の子であることは母の心理にどのような影響を与えていたのであろう。彼女にとってそれは

[illegible]

死と同時にとうに無意識となっていたものがよみがえってくる不安を感じたのではないだろうか。市蔵は彼女が裏切られたことの証である。そうすれば、市蔵に言い聞かせた言葉は、彼女の自我の防衛機制である反動形成の意味を担う。松本は次のように言う。

彼等は血を分けて初めて成立する通俗な親子関係を輕蔑しても差支ない位、情愛の糸で離れられないやうに、自然から確かり括り付けられている。―略― 夫だのに姉は非常に恐れていだ。(「松本の話」五)

(傍点高見、以下すべて同じ)

この「恐れ」という言葉は母親の心理を如実に物語っていると考えられる。

では、市蔵の母はどのような人物として描かれているだろうか。彼女に関する部分を抜き出してみたい。

須永の留守へ行くと、彼の母は唯一の楽しみのやうに斯ういふ調子で倅の話をするのが常であつた。敬太郎の方で須永の評判でも持ち出さうものなら、何時迄でも其問題の後へ喰付いて来て、容易に話題を改めないのが例になつてゐた。 (「停留所」十)

敬太郎が田口家で何度か門前払いを食わされた成行きを話そうとした場面では、

「左様で御座いますとも」とか、「本當にまあ、間の悪い時にはね」とか、何方にも同情したような間投詞がでるので……

(「停留所」十二)

などが挙げられる。これらの描写に見られるのは、息子市蔵に対する[illegible]

くもない　市蔵が小間使の子であることは母の心理にどのような影響を与えていたのであろう。彼女にとってそれはとっくの昔に克服したことであったかもしれないが、夫の蔵への執着と表面的な穏便さであろう。

さらに、「須永の話」では市蔵自身の口から母は語られる。

尤も父は癇癖の強い割に陰性な男だつたし、母は長唄をうたふ時より外に、大きな聲の出せない性分なので、僕は二人の言ひ爭そふ現場を、父の死ぬ迄未だ曾て目擊した事がなかつた。……僕等の宅程静かに整のつた家庭は滅多に見当らなかつたのである。

母は僕に対して死んだ父を語る毎に、世間の夫のうちで最も完全に近いものの様に説明して己まない。

母の性格は吾々が昔から用ひ慣れた慈母といふ言葉で形容さへすれば、夫で盡きてゐる。僕から見ると彼女は此二字の為に生れて此二字の為に死ぬと云つても差支えない。……母は生活の満足を此一點にのみ集注してゐるのだから……

（以上「須永の話」四）

母は昔堅氣の教育を受けた婦人の常として、家名を揚げるのが子たるものの第一の務だといふ様な考へを、何より先に抱いてゐる。

（「須永の話」五）

このような描写にみられるのは彼女の「家庭」、「家」に対する異常な執着心、完全主義、理想主義である。これは、母に封建的な旧い「家」中心の思想を代表させて、市蔵の近代知識人の思想と対立させることも可能であろう。しかし、ここでは母個人の内部に問題があったように思う。彼女は自分の築く家庭を完全なもの、理想的なものとすることによって彼女の受けた傷を癒していたのではないだろうい時にはね」とか、何方にも同情したような間投詞がでるので……

（「停留所」十二）

などが挙げられる。これらの描写に見られるのは、息子市蔵の母は夫と小間使の不義に最初の「家庭」の危機を感じたとき、「子の出来ない」自分を責め、「義理」からでも自分の子として市蔵を養育することで「家庭」の平和を維持したのであって、夫に対して何の感情的な恨みをぶつけることもなかったと容易に想像できる。ならば、市蔵は言い聞かせ、自分は慈母に徹することによって、自分の内部の空白を自分にも他人にも隠しながら「家庭」を守り続けていたと考えられる。それが「静かに整のった家庭」で、その裏には偽善的な匂いも虚飾の色も多分に含まれていたのである。

「停留所」では、須永の家庭について、「昔から重詰にして藏の二階へ仕舞つて置いたもの」、「出来合以上の旨さ」、「紋切形とは無論思はないけれども、幾代も掛って辭令の練習を積んだ巧み」等の形容によってその底に潜む人為的な窮屈さを表現している。これは、市蔵の母が築いてきた「家」を象徴しているのであり、そこには敬太郎も感じているように、「調子外れの自由」は一切存在しないといえよう。

結局、市蔵の母は息子の出生の秘密に基づく彼女の不安を内部に隠し、その反動として市蔵に執着し、「家庭」を理想的なもの、完全なものとすることに徹していたのである。つまり、母は殆ど慈母を演じるために彼女の生を費やしているのだといえよう。

さて、以上考察した母の性質から考えると、恐らく、市蔵の母は夫と小間使の不義に最初の「家庭」の危機を感じたとき、「子の出来ない」自分を責め、「義理」からでも自分の子として市蔵を養育することで「家庭」の平和を維持したのであって、夫に対して何の感情的な恨みをぶつけることもなかったと容易に想像できる。ならば、市蔵は

母によって学ぶはずの感情というものから疎外されてきたのであり、母の不在した家庭に生い立つことになったと考えられよう。

このことは、市蔵の「僕は母と自分と何處が何う違つて、何處が何う似てゐるかの詳しい研究を人知れず重ねたのである」という告白にもつながる。

缺點でも母と共に具へてゐるなら僕は大變嬉しかった。長所でも母になくって僕丈有ってゐると甚だ不愉快になった。……略……　もっと母の人相を多量に受け継いで置いたら、母の子らしくって嘸心持が好いだろうと思ふ。　（「須永の話」十九）

ここで、松本や第三者には「本當の母子よりも遙かに仲の好い継母と継子」と見える親子関係が市蔵によって否定されているわけで、彼が本当に母親らしい母、また母の子らしい自分を求めている姿が窺えるのである。

そして、何よりも市蔵親子間の愛情を揺るがすのは、母親が「血統上の考へ」から千代子を市蔵の嫁にしたがっている事実である。「仕舞に涙ぐんで、實は御前の為ではない、全く私の為に頼むのだ」というこの事実は、突き詰めれば、市蔵の愛情に対する裏切り行為である。考えてみれば母親に残されているのは、彼女が築き上げた偽りの「家庭」と市蔵への不自然な愛情である。彼女も存在の不安に怯える気持も必然であろう。

さて、このような母親の姿とその子どもへの影響を認識されていたわけで「母の体験」を欠いたままで生い立つよう。

ここで市蔵の母に欠けていたものを示唆してくれるであろうと信じるシュヴィングの「精神病者の魂への道」から引用してみたい。

母なるもの（Mutterlichkeit）と母親愛（Mutterliebe）とは同一ではない。母なるものとは、根源的な母なる性から発し、そして女性の献身への準備性から生ずる昇華の産物である。献身への準備性はしかしながら対象に向けられている。それは自我リビドを対象リビドに殆ど完全に変換することによって「われ」（Ich）を「なんじ」（Du）の中に開いてゆく（Aufgehen des Ich im Du）ことを志向する。……略……

母なるものの欠けている母親は、ひとりの対象（objekt）として彼女の子供を愛するのではない。彼女はそれを何よりも彼女自身の一部分として愛するのである。

（小川信男・船渡川佐知子共訳　みすず書房）

このように、シュヴィングの言葉を借りれば市蔵の母は「母なるもの」の欠けた母親なのである。彼女が例の「家庭」を築き上げたのも自分のためであれば、市蔵を愛したのも内部の不安を押えるためで、自己愛から発したものである。そして、千代子と市蔵の結婚問題も彼女の言葉通り、「全く私の為」なのである。彼女の行為は全て自己に始まり自己に帰する。そこには、深い意味における母は存在しないのである。

ことになる。市蔵に理由のわからない母の悲痛なまでに可

さて、このような母親の姿とその子どもへの影響を認識するとき初めて、市蔵の苦悩の本質に近づけるのだといえされているわけで、「母の体験」を欠いたままで生い立つことになったのである。先に挙げた市蔵の自分と母についての研究には明らかに母親との同一化の願望が現われている。

さて、以上のように、市蔵の生い立ちと家庭を特に母との関連で考えてきたが、第二章では、このような生い立ちを背景とした市蔵を、千代子との関係から追っていくことで、彼の苦悩の本質を探っていきたい。

第二章　市蔵の苦悩について

『彼岸過迄』の中心は市蔵と千代子の恋愛問題における市蔵の複雑な心理にある。市蔵は、自分と千代子の問題を純粋に二人だけの問題として考えることのできない不幸を背負う。愛情と畏怖の複雑にからみ合った母への気持と、自分の自我との間で彼が千代子のことを考えるとき、彼は自分自身にも説明のできない不思議な心理に苦悩する。

市蔵の母は千代子が生れたとき市蔵の嫁にと田口夫婦に頼んで承諾されている。その後彼女は、「二人を成る可く仲善く育て上げやう」と努めるのである。松本は「姉は無理な夢を自分一人で見てゐるのである。」と市蔵の母の努力の空虚さに言及する。「無理な夢」とは母の築いた「家庭」にもそのまま当てはまる。それによって出来上がった不自然な親子間の愛情がまた、母の手によって市蔵と千代子の間に繰り返されようとする。母の人為、技巧は皮肉にも結果として、「男女としての二人を次第に遠ざから」すないのである。

ならば、市蔵は「母なるもの」の絶対的な愛情から疎外ことになる。市蔵は理由のわからない母の悲痛なまでに頑固な願いに不安を感じる。

さて、市蔵は元より千代子は「厭でも何でもない」のだが、「當人も僕の所へ来る氣はなし、田口の叔父も叔母も僕に呉れたくはないのだから」と母の希望に添うことができない。これには市蔵の強い自尊心が働いている。片岡良一氏は「『彼岸過迄』の意義」において市蔵について次のように述べられている。

彼はどこまでも強い自我を持った、従ってどういう場合にも自我の真実を生きずにはいられぬ人間として造型されている。見失った神のかわりに彼自身の内面的真実（自我）に権威を認めるようになった近代人としての典型が、そこにあったわけだろう。

このような見解は表面的には至極妥当のように考えられる。しかし、今一度具体的に市蔵を観察することで彼の苦悩が別の様相にあったことを確かめたい。

ある時千代子の母、つまり市蔵の叔母と彼の間に「市さんも最う徐々奥さんを探さなくつちゃなりませんね。」等と結婚問題についての会話がなされる。すると二人の会話に不意に千代子が「妾行って上げませうか」と入ってくる。そのときの叔母の「御前の様な露骨のがら〳〵した者が、何で市さんの氣に入るものかね」という低い声のうちに、市蔵は「窘めるような又怖れる様な一種の響」を聞き、「形成を具へない断り」と解釈する。このような例は市蔵の性質を最も良く表わしている。

さらに、市蔵は叔父の田口から「輕く此事件を解釈してゐる」のか、「世慣れた人の巧妙な覺らせ振」か解らない言葉で、母と田口の間に交された市蔵と千代子の結婚の約束を聞かされる。叔父の意向は彼には解らない。しかし、彼はその時以来千代子を貫わない方へ傾くのである。

以上のようなことに即して考えられる市蔵の性質として、主体性の欠如と他者を解釈しなくては済まない要求を挙げることができる。つまり、彼は自分の行動を自らの内部的欲求に任せて行うというより、他人の意向に依存して行っているといえるのである。故に先に挙げた片岡氏の説には無理があると思われる。彼が千代子を貰うか否かを決定できるのは彼ではなく、叔父、叔母であり、また千代子の気持なのである。もしここで田口がこの昔の約束を実行するような意向を漏らしたとするなら、たぶん彼の気持は反対に傾いたであろう。これも市蔵が「運命のアイロニー」を解す哲人故の行為なのかもしれないが、それは殆ど体裁の理屈に等しい。

「意地の強い」彼は、「成る可く自我を傷つけない様に」行動しなくてはいけないのであり、それには人間関係において相手を充分に把握する必要ができる。そこで「自分の腹は何故斯う執濃い油繪の様に複雑なのだろう。」と懐疑する市蔵が生れるといえる。「何の因果で斯う迄事を細かに刻まなければ生きて行かれないのかと考へて情なかつた。」という彼は、つまり「事を細かに刻まなければ」他者の心理を理解することができないので、行動を選ぶことができず、「生きて行かれない」のである。他者の心理など到底、完全に理解することは不可能であろう。市蔵の悲劇は、実在する過渡状態である人間の心理を固定した形体として認識しようとする要求に見い出される。このことは、後に自分の正体の解り悪さに茫然とした市蔵を考えれば、あまりにも無理な要求であると思われる。それを敢てしなくてはいけない市蔵は、永久に内に内に考えを巡らすだけで、主体的な行動を一切とれなくなるのだといえる。

よって「僕は意地の強い男で、又意地の弱い男なのである。」（「須永の話」十三）という市蔵自身の言葉も明らかに理解できる。「意地」を「自我」と置き換えるなら、「自我」を守るため、他者を解釈してのみ行動をとれない彼は結局その行動において主体性はなく、結果として「自我」も歪められているわけで、市蔵は「自我の強い男で、又自我の弱い男」ともいえるのである。自我の防衛にばかり生きている彼は結局偽りの自己を生きているのであり、ここに潜在するのは他者への不安、畏怖の念である。そして、これが母への畏怖の念から形成された市蔵の性格の悲劇であることは殆ど疑えないと思われる。

さて、このような市蔵の自我の苦悩をさらに追っていくことにする。

千代子が風邪を引いて一人で留守居しているときに市蔵は田口家を訪れる。千代子は昔市蔵に描いてもらった画をまだ持っていて苦笑する彼にそれらを見せる。そして、「妾御嫁に行く時も持ってく積よ」と言う。市蔵はこの言

刻まなければ生き抜かれないのだ。まったく悲しかった」という彼は、つまり「事を細かに刻まなければ」他者の心理を理解することができないので、行動を選ぶことができ葉を聞いて急に悲しい気分になるのだが、それが千代子の胸に応えそうなのを恐ろしく思う。このような彼の恐れは何を意味するのであろうか。市蔵は自身を感情家として余りに貧弱と考えている。しかし彼は感情を持たないのではなく、それを表現するのを恐れているのであり、この場合千代子に自分の感情を悟られた際の彼女の態度への不安が根底にあると考えられる。つまり彼の「悲しい気分」は現実に存在としての正当性があるのか彼には判断できないのである。（これは、鎌倉で高木という人物が出現したときに、「僕は存在の權利を失った嫉妬心を抱いて、誰にも見えない腹の中で苦悶し始めた。」（「須永の話」十七）という部分につながっていくものであろう。）さて、次に彼はわざわざ「何時頃嫁に行く積か」と聞く。「もう極つたの」という彼女の言葉に「僕の心臓は、此答と共にどきんと音のする浪を打つた。さうして毛穴から這ひ出す様な脅汗が、脊中と腋の下を不意に襲つた。」とある。市蔵は千代子への愛を自覚せざるを得ない。そして「自分という正體が、夫程解り惡い怖いものだろうかと考へて」茫然とするのである。これは知識人であり認識者であると自覚する市蔵へのアイロニーである。彼は自分というものを新たに見つめ直さなくてはなるまい。

「僕はよく人を疑ぐる代りに、疑ぐる自分も同時に疑がはずには居られない性質」（「須永の話」十六）だと市蔵は言う。「人を疑ぐる」とは先に述べたように対人関係において彼の他者不安に立脚する他者解釈への方法である。まだ持っていて苦笑する彼にそれらを見せる。そして、「妾御嫁に行く時も持ってく積よ」と言う。市蔵はこの言では、自分を疑がうことは自己解釈への方法といえよう。つまり、彼は他者不安と同時に自己不安をも感じているのである。そして、これは自我の防衛にばかり生き、結局偽りの自己を生きることを余儀なくされた結果の感情麻痺の状態を意味している。自己を懐疑することは自己認識の願望による。「僕は始終詩を求めて藻掻いてゐる」（「須永の話」二十五）とは自己実現の願望を意味し、実現には自己が必要である。しかし、市蔵は確固とした自己認識の根拠を持たないのである。

さて、このように他者と自己は彼にとって不安の対象であるが故に懐疑せずにはおれない。「須永の話」には市蔵が他者や自己について懐疑している場面が多数ある。市蔵は鎌倉での千代子の言行を、「一の意味に解釋し終つたすぐ後から、丸で反對の意味に同じものを又解釋して」混乱し、「徒づらな忌々しさを感じ」る。また、母を送って来た千代子が高木の話をしないことを彼女の好意であるか技巧であるかを考え、また技巧をいくつもの意味に割って苦悶し続けるのである。そして、どちらにしても確固とした判断を持つことができないのである。市蔵には一つの出来事は相対的な多数の解釈、認識に帰結する。ならば自己に対しても他者に対してもその不安は永久に消えることはできない。

結局、市蔵の求めるものは絶対であると信じられる唯一の解釈、認識である。相対的認識は存在不安につながる危機を内在している。つまり「見えすぎる人間の不幸」とは、

その認識故に動けない事実であり、このことは自己実現を不可能にし、人間存在の根底の不可思議さへと人を導いていくものであろう。彼が求めるものは絶対的価値を有するものでなくてはいけない。しかし、市蔵において不可思議な自己はそれに値しない。よって市蔵の苦悩は、自我の絶対的優位を信じて行動しようとする近代知識人のそれとは質的に異ったものである。

市蔵の希求するもの、それは見失った自己であり、統一された自我である。そして、これは人間存在の根拠と成り得るものであろう。また、それは「母なるもの」の体験によって形成されるべきものではなかったかという推測も敢てできるのではなかろうか。